

# ダイズ病害虫防除対策（8・9月）

## 1 紫斑病

- (1) 開花後 25 日頃から株に紫黒褐色の不整形病斑を形成し、種子には紫色の病斑がへそを中心に拡大し、品質に影響を与えます。
- (2) 薬剤防除は開花後 20～40 日頃に 1～2 回実施してください（表 1）。薬剤耐性菌の出現を防ぐため、同一系統の薬剤の連用はさけてください。
- (3) 収穫の遅れや収穫後の放置で被害が増加するため、適期収穫と速やかな乾燥・調製を心がけてください。

表 1 紫斑病の防除薬剤

	薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、10a 当たり使用量	本剤の 使用回数
地上散布	アミスタートレボン S E	エトフェンプロックス	3 A	収穫 14 日前まで	1,000 倍	2 回以内
		アゾキシストロビン	C 3			
	ニマイパー水和剤	ジエトフェンカルブ	B 2	収穫 14 日前まで	1,000～ 2,000 倍	4 回以内
		ベノミル	B 1			
	プランダム乳剤 25	ジフェノコナゾール	G 1	開花後～ 収穫 7 日前まで	3,000～ 5,000 倍	2 回以内
無人航空機による散布	アミスター 20 フロアブル	アゾキシストロビン	C 3	収穫 7 日前まで	16～24 倍 (0.8L)	2 回以内
	アミスタートレボン S E	エトフェンプロックス	3 A	収穫 21 日前まで	8 倍 (0.8L)	2 回以内
		アゾキシストロビン	C 3			
	ニマイパー水和剤	ジエトフェンカルブ	B 2	収穫 14 日前まで	8～16 倍 (0.8L)	4 回以内
ベノミル		B 1				
	プランダム乳剤 25	ジフェノコナゾール	G 1	開花後～ 収穫 7 日前まで	16～24 倍 (0.8L)	2 回以内

注) 水和剤、乳剤は 10a 当たり 100～300L 散布する。

注) 使用回数はその剤の使用回数であり、使用する際には有効成分ごとの総使用回数を確認すること。

## 2 べと病

- (1) 本病は降雨の多い 6～7 月と 9 月に多発し、葉に黄白色の不整形病斑を形成し、葉の裏に淡灰色の綿毛状の菌叢ができます。発生が多いと生育の抑制や落葉がみられます。
- (2) 「里のほほえみ」などの罹病性の高い品種では生育初期から発生がみられる場合があるため、密植や過繁茂で通気性が悪くならないように注意してください。
- (3) 薬剤による防除は発生初期から 7～10 日おきに実施してください（表 2）。

表2 ベと病の防除薬剤

薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、10a 当たり使用量	本剤の 使用回数
アミスター20フロアブル	アゾキシストロビン	C 3	収穫 7 日前まで	2,000 倍	2 回以内
フェスティバルM水和剤	ジメトモルフ	H 5	収穫 45 日前まで	750 倍	3 回以内
	マンゼブ	M 3 UN			
ライメイフロアブル	アミスルプロム	C 4	収穫 7 日前まで	2,000 倍	3 回以内
ランマンフロアブル	シアゾファミド	C 4	収穫 7 日前まで	1,000～ 2,000 倍	3 回以内
リドミルゴールドMZ	マンゼブ	M 3 UN	収穫 45 日前まで	500 倍	3 回以内
	メタラキシル及び メタラキシルM	A 1			

注) 水和剤、フロアブル剤は 10a 当たり 100～300L 散布する。

注) 使用回数はその剤の使用回数であり、使用する際には有効成分ごとの総使用回数を確認すること。

### 3 アブラムシ類

- (1) ジャガイモヒゲナガアブラムシはダイズわい化病ウイルスを媒介することがあります。ダイズアブラムシやマメアブラムシは多発すると葉に黄色の吸汁痕がみられ、葉の萎縮などが発生します。
- (2) わい化病が発生したところのあるほ場では、有翅虫飛来初期から薬剤による防除を行ってください。それ以外のほ場では、葉に吸汁痕が多くみられる場合は防除を行ってください。
- (3) 使用薬剤及び注意事項については、ダイズ病害虫防除対策（6・7月）を参照してください。

### 4 ツメクサガ

- (1) 8月中下旬に第2世代幼虫が発生します。この時期の被害は葉のほかに莢や子実をえぐったように食害します。
- (2) 幼虫の虫齢が進むと加害量が急激に増加するため、食害が目立ち始めたら速やかに防除を行ってください。
- (3) 使用薬剤及び注意事項については、ダイズ病害虫防除対策（6・7月）を参照してください。

### 5 ウコンノメイガ

- (1) 7月下旬頃から幼虫が発生し、葉を円筒状に巻き、食害します。多発すると登熟に影響します。
- (2) 葉色が濃く、株が繁茂しているほ場で被害が大きくなる傾向にあり、ほ場によって発生状況が異なるため、よく確認してください。
- (3) 葉巻の発生が目立つ場合は、若齢幼虫の多い7月下旬～8月上旬に防除を行ってください（表3）。

表3 ウコンノメイガの防除薬剤

薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度	本剤の 使用回数
スミチオン乳剤	M E P	1 B	収穫 21 日前まで	1,000 倍	4 回以内

注) 乳剤は 10a 当たり 100～300L 散布する。

注) 使用回数はその剤の使用回数であり、使用する際には有効成分ごとの総使用回数を確認すること。

## 6 マメハンミョウ

- (1) 成虫が7月から8月にかけて出現し、群れで葉を食害します。発生が多いと葉が食い尽くされることがあります。
- (2) 食害が目立つ場合は防除を行ってください(表4)。

表4 マメハンミョウの防除薬剤

薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用時期 (収穫前日数)	10a 当たり使用量	本剤の 使用回数
マラソン粉剤 3	マラソン	1 B	収穫7日前まで	3 kg	3回以内

注) 使用回数はその剤の使用回数であり、使用する際には有効成分ごとの総使用回数を確認すること。

## 7 吸実性カメムシ類

- (1) 開花期(7月下旬~8月上旬)以降に飛来して莢や葉に産卵し、幼虫や羽化成虫が黄熟期まで長期にわたって加害します。子実肥大の初期に加害されると、種子がほとんど肥大しなくなります。中期以降に加害されると変形、変色した子実となり、商品性が著しく低下します。
- (2) 着莢期~子実肥大盛期に1~2回薬剤による防除を行ってください(表5)。

表5 吸実性カメムシ類の防除薬剤

	薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、10a 当たり使用量	本剤の 使用回数
地上散布	アミスタートレボン S E	エトフェンプロックス	3 A	収穫14日前まで	1,000倍 (100~400L)	2回以内
		アズキシストロビン	C 3			
	アルバリン 顆粒水溶剤	ジノテフラン	4 A	収穫7日前まで	2,000倍	2回以内
	スタークル液剤 10	ジノテフラン	4 A	収穫7日前まで	1,000倍	2回以内
	スタークル 顆粒水溶剤	ジノテフラン	4 A	収穫7日前まで	2,000倍	2回以内
	スミチオン乳剤	M E P	1 B	収穫21日前まで	1,000倍	4回以内
	ダントツフロアブル	クロチアニジン	4 A	収穫7日前まで	2,500~5,000倍	3回以内
	トレボン乳剤	エトフェンプロックス	3 A	収穫14日前まで	1,000倍	2回以内
無人航空機による散布	スタークル液剤 10	ジノテフラン	4 A	収穫7日前まで	8倍 (0.8L)	2回以内
	トレボンエアー	エトフェンプロックス	3 A	収穫14日前まで	8倍 (0.8L)	2回以内
	アミスタートレボン S E	エトフェンプロックス	3 A	収穫21日前まで	8倍 (0.8L)	2回以内
アズキシストロビン		C 3				

注) 特記ない場合、顆粒水溶剤、液剤、乳剤、フロアブル剤は10a当たり100~300L散布する。

注) 使用回数はその剤の使用回数であり、使用する際には有効成分ごとの総使用回数を確認すること。

## 8 マメシクイガ

- (1) 土中に繭を作り、越冬するため、連作を続けると発生量が急激に増加します。3年以上の連作はさ  
け、田畑輪換を行ってください。
- (2) 成虫は年1回、8月中旬頃に羽化します。日長時間に反応して発生するため、発生時期は年ごとに大  
きく変動しません。羽化成虫は8月下旬～9月中旬に莢に産卵し、幼虫が種子を加害して20日程度で  
脱出し、土中に繭を作ります。
- (3) 3年以上連作しているほ場やその周辺では8月5半旬頃の薬剤防除を基本とし、多発が予想される場  
合には9月1～2半旬にも追加防除を行ってください(表6)。

表6 マメシクイガの防除薬剤

	薬剤名	有効成分名	薬剤 系統	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、10a 当たり使用量	本剤の 使用回数
地上 散布	ダイアジノン粒剤5	ダイアジノン	1B	収穫30日前まで	4～6kg	4回以内
	プレバソン フロアブル5	クロラントラニ リプロール	28	収穫7日前まで	4,000倍	2回以内
無人航空機 による 散布	プレバソン フロアブル5	クロラントラニ リプロール	28	収穫7日前まで	16～32倍 (0.8L)	2回以内
	アミスタートレボン S E	エトフェンプロックス アゾキシストロビン	3A C3	収穫21日前まで	8倍 (0.8L)	2回以内

注) 地上散布の場合、フロアブル剤は10a当たり100～300L散布する。

注) 使用回数はその剤の使用回数であり、使用する際には有効成分ごとの総使用回数を確認すること。

※農薬の登録内容については慎重に校閲していますが、登録内容の変更は随時行われています。また、同じ農薬名でも農薬会社によって登録内容が異なることがありますので、農林水産省のホームページ (<https://pesticide.maff.go.jp/>) 等で最新の登録内容を確認してください。(記載中の登録内容は令和5年7月25日現在)